宗像

発行所　宗像大社
毎月一日発行　宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話神湊133番
定価一年送料共　500円

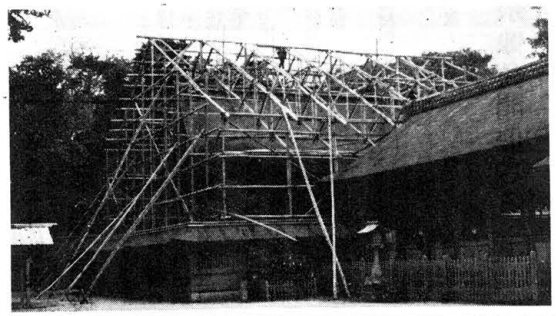
御本殿解体愈々着手

十二月末日終了予定

最近、当社に参拝された方は、すぐお気づきのことと思うが、現在、御本殿は丸裸み、トタン葺きの大きな素屋根ですっぽりと覆われている。御本殿修復工事は、既報のとおり、境内に修理事務所が設けられ、工事主任田尻技官監督の下に着々と準備が進められていたが、漸く基礎的調査を終え、愈々具体的工事施行の段階に入った。周知のとおり、御本殿は国の重要文化財に指定されており、その修復に当っては創建時の様式を踏襲し、材料も使用出来得るものはその保全かし、損傷された部分だけを取り換えて補修し、出来得るだけ忠実に復元して永く後世に伝えようというもので、その作業は極めて慎重を要するものである。従って解体工事に先立ち、先づ現在の御本殿を風雨の雪から守る為、全体を覆う素屋根仮設工事が施行されたもので、トタン板五百三十枚で葺き上げた大きな素屋根がこの程完成し、目下この夏いの中で、屋根、垂木、梁、桁、柱等と、建築とは逆の順序で慎重に解体が進められている。この解体作業は十二月末日までに終了の予定である。一方、これと並行して、御本殿右側境内境内に、七間、二間の大工作業場が建設され、境内は急に雑然としてきた。この一、二年、御参拝の皆様には何かと不便を御掛けすることになるが、各位の御了承を御願いする次第である。

また、先月中旬から神社の給水工事も開始された。従来、造物の建設により将来は、現在を遥に上廻る水の需要が当然予想され、水不足は一層深刻化する訳である。この問題を解決する為、これから常時落差により、境内各所に給水しようというもので、一日約七十屯程度の給水が可能となる。

本工事が完成すれば、この春、施行の排水工事と相俟って、神社永年の懸案であった給排水の悩みが解決する訳で、その完工が待たれている。



神具、装束
結婚式場用品
株式会社　井筒
福岡支社　福岡市吉塚西林寺町　西林寺内
電話　九四五六
本社　京都市下京区油小路通六条北入
電話　京都　㊇二三三番
㊇六八・二三三番
ビニ・九六九番

文化庁長官　今日出海氏参拝さる

去る十一月十一日火曜日に文化庁長官今日出海氏が宗像大社辺津宮に参拝された。

現在文化庁文化財保護部建造物課の指導による重要文化財辺津宮本殿の解体修理中の現場を視察。大社の神職が今後の復興事業計画について現地で説明した。

この復興事業については先般、当社代表保富宮司が文化庁を訪れ、長官等に於いて概要を説明してあったので今回は現地に於いて実地構想を視察していただいた次第である。その後、宝物館で先月なくわれた沖ノ島祭祀遺跡学術調査の出土品の説明を九州大学の岡崎助教授から熱心に聞かれた。長官は沖ノ島の祭祀神宝については非常な関心を持っておられる様子であった。特に岡崎助教授は先日帰国各地を視察して帰られたばかりであり、沖ノ島出土の神宝と韓国との関係について、新しい視野に立って解説があり、同行の人々も熱心に聴き入っていた。

当日は当大社参拝の後も長官のスケジュールがあり、晩秋の宗像にご滞在を惜みつつ一路博多に向われた。（写真は左から岡崎助教授、今長官、久保宮司）

正月のおまつり

大祓式

今年最後の大祓で一年の間にしらずしらずの間に犯した心身の罪穢を紙日の人形に託して祓うまつりです。この祓いを無事におえて清々しい気持で新年を迎えることになります。

元旦祭

新しい年の始めにあたり、国家安泰、家内安全、五穀豊穣を祈念します。特に当社に於いては交通安全の御神徳に因み新年の交通安全の大祈願祭を斎行いたします。

大晦日　午後五時　大祓式　除祭
一月一日　午前六時　元旦祭
二日三日　午前九時　新年祭

宗教学上の神道に就いて　㈡

この論文は、九州女子大学々生、坂井初美さんの労作である。思想的にも複雑多岐、宗教的にも難問山積、この現代を生きる若い女学生が、神道思想の中に民族伝承の精神をいかに把握しようとしているかを、この真摯な所論に知りたいと、前号と本号に分割して掲載した。

×　×　×

氏族制度的な社会の生活は、その生活感情のうちに、一つには活きものをよく保つこと、一つには生と系譜的な関係に於いて考えることが行なわれるのである。これが、民神の祭が早く発生し、長く続く所以である。日本民族の一般の信仰は、古きものの保存と、その回顧、そして親愛さをもたらす系譜的な関連の上に立っているのである。

神道は歴史的なものである。それは突然に発生成立したものではなく、日本の長い歴史と共に展開してきた。宗教学的には、所謂民族宗教に属することは前述の通りであるが、日本民族が古代において、その集団生活を形成した際に、その根元の原理として生み出したのが、神道の精神であった。その時代の人々は、全てこれによって規制されたので、政治、経済、文化のすべてが、神道そのものであった。しかし、太古の人々によって日常生活に見られた神々も、いつしか血縁的な関係に結ばれてくる。周囲の自然事物に於いて見た霊異も、系譜的なつながりが考えられてきている。自然崇敬もここには祖先崇拝と称されるものに移って来た。ここにも自然の事物にみる霊異ではなく、歴史の崇敬であると考えられる。日本民族にあって、歴史の宗教性が考えられるのである。

神道は歴史的なものであることを強調して来たが、日本民族は、その歴史の途中において、世界宗教としての仏教を受容し、大いにこれに帰して、盛んな信仰を示した。このような場合に、他民族はその本来の民族宗教をなげうって、新しい世界宗教一本にきりかえるのであるが、日本民族は、世界宗教を受容しながら、依然として民族宗教たる神道を保存したばかりでなく、むしろ、これを並行的に発展させたのである。いつも神仏といい、社寺といって、新旧相並んでこれを仰ぐ、古いものを捨てなかった仏教の盛行は決して神道との位置を失わずことなく、外来宗教との同居した宗教として、今日に至っているのである。

西田直二郎氏は「日本民族の精神的伝統と神道」という論文の中で、「地縁の関係による氏神の信仰にも歴史的因縁が強い。歴史的因縁が地縁の関係を力強く支えているのである。古来の神祇崇敬には、かような歴史的因縁が強く働いている。たしかに日本にあっては、宗教の歴史性とも言うべきものが強く存するのをここに思うのである。これは歴史そのものが、宗教性を有することにも思い及ぶのである。日本の神道なるものは、ひろく歴史の宗教性について考えねばならないものをもっている」と述べられている。このように歴史的で集団性を有するわが国の宗教、神道の意義は深く大きい。神仏融合で、素朴な信仰をもつ日本民族と共に起り発展して来た神道は、文字通りの民族信仰である。神の権威は人々の歴史的経験の上に成長してきたのである。日本民族的性格神の特性を現わしているのが神道であるといえる。

最後に、日本国民の宗教統計（一九五一年）の数を記することによって、日本国民における神道の位置を観たいと思う。

	教会	教信徒
神道	一〇六・八九五	四・〇四二人
仏教	七三・八四四	四二・六三七
基教	二・七六二	四一五
他	七九九	二・九四五

日本固有の神祇の崇敬、長い歴史的な信仰、神学をもたぬ直ちに神を見るものは、宗派を超えた大きな信仰がそこに存在している。ここにも日本民族の宗教信仰の特色があると考えられるのである。この日本的な心の伝統を持つことも大切ではなかろうか。（完）

阿蒙言少

女子生の質問、女神を祭った神社でおみきを供えたり、時には四本柱が刈んでいるが、太古の女性は大酒を飲んでいたのでしょうか。　安芸を含んだ質問とも受取れるが、人間界の事象にひきくらべて、奇異な感もあろう。わが国の社会構造で、穀物をはじめ野菜魚、介等日常生活に必須の大切なものの、神にも献げたわけで酒もまた主要な娯楽の種であったろうと、酒談義入とさり〇今日の酒造は江戸時代に発明されたので、その昔は搗り酒であった。難の仕事が主人に叱られて逃走する時、腹いせに醸造槽に灰を投げ込んだため搗りがとれて、偶然に清酒が発生されたと云う〇黒田節で有名な母里太兵衛も、福島正則に出された大盃を飲みほして、名槍日本号を直感に及んだが、彼の飲んだのも搗り酒であったであろう。主君の命をうけて正則の部に出向いた太兵衛は、酒の飲めない豪傑で、難題を吹掛けて黒田一節の資材となった由。真偽のほどはわからない〇豪傑は酒を好むと定義づけられているが、ある客人に生きた老人の話によると、侠客の頭領格は酒を飲まなかった。復讐で侠客の酒豪の場面を見かけるが、あれはウソで清次郎長は侠客道の代表的人物だけに、酒に親しんだには考えられない。と孔子の教えに、酒は量なし乱に及ばず、とある。古代の中国でも、ヨッパライがいたのか、この戒めが証明しているとも想われる。中国の人達と会食した時、グラスを飲みましょ客にその盃を見せる。毒を入れて酒を飲む証のいい噂話の名残りと聞いたが、誤りであろうか〇世界中の民族は、神と酒を必ず持っている。両者ともそれぞれ民族の長い歴史に伝承されている。宗教学と酒学には、除外される民族はないようである。（白雲）

第一〇三回　宗像大社歌会詠草

毎月十五日〆切　詠草到着順

金鋼かけてマストを登りゆくすばやき水夫（かこ）は少年にして　戸畑　安川　浄生
ダイヤルを夫が廻して娘がかける合格通知家中でする　戸畑　田中ハツセ
深田中野節子　仕事終り机に向ひ歌読めば便ひと手のこまかく饗ふ　山田　吉田佐市郎
宮田片山朝子　嬉にもみし茹子の雫を掌にうけて紫紺に染みしを傷せと充つ　吉田　占部由久
武丸原田リノ　たまに来て見る目すがしき海の大気を吸ひて心を洗ふ　香椎　桜井ツ子
大井安部重郎　うす雪を浴びてすゞ野遊く鳥く富士の高嶺は神々しくも　田熊　小野かをる
大井安部静子　絵に愛でし富士の全容を飽かず眺めし胸の高鳴り　この頃を我ひたれど健康に内孫の世話日々を楽しく　東京　山本政東
福岡麻生初栄　くさぐさの秘めごと語りし名月もアポロあばきて味気なく思う　日の元を秋霧に導かれ沖ノ島に自ら木に神の精　田熊　鷲頭かつ代
徳重滝口千代　雨風の岬に立ちて待ちわびし御座船つきて陽の輝やけり　きり草すきまじきまで霜に衰えて夕べをながく花明りせり　徳重　石松やす子
津屋崎麦野時雄　秋晴れの波静かなる内海にひねもすかかる釣舟あまた　霜月の窓しなくすみ渡り菊明日菊間辺に香ふ　東郷　藤崎辰子
田熊原部住雄　吾が友は吾れをつかわし御心をなさせ給へと祈る日々なり　朝つゆの園生にかろく会釈して初咲きの菊三輪を摘む　大井　村山幸生
久留米篠田太郎坊　検診車師弓の前で血圧を測れば秋の日はやわらかし　長岡になやみしあとも見えぬまで豊に稔る秋の田の福　武丸　立石昇
大井吉田和子　刈りを終りて帰れば早や昔子は高に登りて柿を食ひおり　観光の人混みのなかムウムウの似合う女（ひと）あり吾が前を行く　福岡　高橋傘翁
田久小方実（宗像出身、入江大学長就任に）　（八十一回の誕生日）　有り難や二万九千二百二十日間早さへ二十度過ぎけり
思はずもほっえみ湧けりストやめて勉強せよと新学長起つ　福岡江崎琴子　遠賀　長畑房江
福岡江崎琴子　はぜもみぢのひときわ目立つ紅が真向うの山に点々と見ゆ　小倉　伊豆勇泉
一日こそ冷えこみませばそろそろなり冬の支度に心せかれて　小倉伊豆勇泉　渡御に従く艤装三百秋祭船
宮田北原君子　夏明休暇子の取りくれし一日を我と二人でひねもす俳取る　渡御の果て秋潮高まれる　福岡井原元彦
名残竹原円　貫一の言ひ分みんな聞いてるたお宮の松も二代目となり　福岡森八蔵
夜業ヒタヘ帰りのおそかり車今朝は霧のつもれる　福岡　森八蔵
宮田片山一　泣く声も悲しき手光の河童かな草きに埋れし南朝の陵
霧は風に流るいろは坂黄葉は燃ゆる山の裏なり

藩政下の産業交通

大社復興の機運

大化改新の後程なく、制度上の神郡として宗像全郡が規定されたことは、大社創建の本質的意義から当然のことと思われるが、一面天孫奉助の神勅による大使命をもって、国家の形成、民族の発展に貢献された宗像三女神を氏神として、奉斎した宗像族との結びつきが緊密を成していたとも見られるのである。

明治の新体勢に入って、明治四年確立した神社行政は、大社を国幣中社に列し、その後の由緒朗臣、勅祭御加列のことを、宮内大臣、内務大臣に請願したが、旧藩と郡民関係者の熱意がみのって、明治十八年には官幣中社に改められた。その後も大社復興の努力は、徐々ながら関係者によって続けられ、遂に明治三十四年官幣大社昇格が実現したのである。

宮司家は代々神領の行政を司どりつつ、神主としてその面目を保持してきた。然し、時代の推移は有為転変、興亡盛衰の経過をたどり、戦国争乱の末期に大宮司家の断絶となって、神領の実体は失われるに至った。豊臣秀吉の信任厚かった小早川隆景の筑前領の一部に包含され、次いで黒田藩政の治下に収められて、明治維新まで変ることはなかったのである。

十三年に至って郡内町村長一同の情すると共に地元有志を説得して復興の促進に努めることになった。同十七年宗像神社復興期成会が町村代表者の総意によって結成され、出先佐三氏会長として復興運動の先頭に立ち、内務大臣や神社局長官に陳情が強力に続けられたのである。その趣意の当然であること、関係者の熱意とが遂に当局の同意する所まで進んだのであるが、残念ながら終戦によって実現しなかった。

終戦後の世情の混乱は、地元郡民の大社復興の意欲を減退させたが、復興期成会は由緒を明らかにして真姿を世に顕わそうとして、専門学者に依嘱して多くの資料の調査研究に当ったのである。二十餘年の歳月を費して、先年宗像神社史二十二巻が完成した。これは学術書としてこの種の研究では、最高水準にあると評されている。その間津宮の古代の実相を究明するため、前後四回に亘って学術調査が派遣され、徃古の壮厳の就柱も決定していよいよ実行段階に入った。

この機会に、復興期成会では、修復工事に併行して物心両面の復興事業を開始したのである。本年八月会則を改めて宗像大社復興期成会と称し、出先会長のもと役員の就任も決定していよいよ実行段階に入った。

境内の整備や施設の構築が計画され、一面沖ノ島の学術調査も再開されて、専門家による神宝の発掘の本殿と拝殿は、建造以来四百年の歳月を経て昨今その損傷が甚しい状態になった。重要文化財に指定されているので、国費の補助をうけて本年度から、解体修理を行われることになり、去る七月から工事が開始されている。

この修復工事の進行と共に、宗像大社復興の促進に努力されることを期待する。

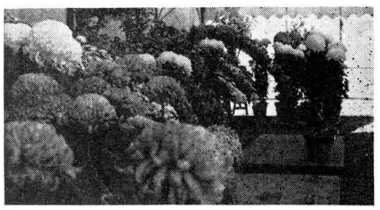
七五三祭り斎行

―第二回菊花展開催―

去る十一月十五日は七五三祝いの日。当社では、十四日から十六日までの三日間に亘り、七五三祭りが斎行された。

期間中は氏子の子供等を始め、近郊からの子供等とそれに付添う親等の晴着姿で社頭は華々しく賑わった。特に宗像大神が国民道を始め、交通安全の神として親しく信仰されている所から、北九州市、福岡市はもとより県内各所からの参拝が多く、七五三詣りと交通安全の御祈願を受ける家族ぐるみの参拝が目だった。

日頃のワンパク振りはどこえや、きれいな和服、洋服に神妙な面もちの豆紳士、淑女、当社の巫女から手渡された御守りや千歳飴、風船などを持って拝殿へ。



神前に大神等の御加護により、子供たちが無事成長したことを御奉告申し上げるとともに、よき国民（おおみたから）として成長するように祈られた。祭典が終ると記念撮影。大きな千歳飴の袋が地面を引きずられて行くさま、風船が割れビックリして泣き出す子、袖をつかんでこぼす子など、ハプニングも続出。他の参拝者からも親切にしていただくなど、笑えましくも心暖まる光景であった。

一方、境内では七五三祭期間にあわせて十一月五日から菊花展が催され、大輪、懸崖、木付等、七十余鉢の花々が晩秋の陽をうけて色とりどりに咲きほこり、参拝者の目を楽しませていた。

この菊花展は昨年より始められ、今年で二回目。これは津屋崎菊花同好会、並に郡内有志の御協力によるもので、二十日まで行われた。この方々の熱意が作品にも現われ、規模の拡張とともに内容より充実したものとなり、参拝者に大変好評であった。

菊花展出品者（敬称略順不同）

天野　安二　勝浦
小沢　新助　〃
大久保義隆　津屋崎
柳田　貞七　〃
植田　滝雄　〃
藤崎　長武　東郷

宗像大社歌会

奉告祭後総会開く

去る十一月十六日、午前十時より当社拝殿に於いて宗像大社歌会献詠百回奉告祭が斎行され、引続き当社さつき寮で総会が開催された。

当社歌会は昭和三十六年に発足し、爾来当社への献詠を毎月一回行って来た。その献詠をこの十月で百回に達成したことから、此度その奉告祭と、それに因む総会が行われた次第である。

この日は井原元彦会長を始め会員二十数名、当社より久保宮司以下二名、会員でもある立石昇氏子会長等が出席、歌会会長、久保宮司より当社拝殿にて献詠の奉告祭が斎行され、引続き当社さつき寮で総会が開催された。

しかしながら、社格は最上位に進む功は奏しても、神社行政の府は社殿の結構、境域の装飾を改めて徃古勅祭の盛儀を再現するまでには、心及ばぬまま、昭和二年に至った。この年挙郡一致の体勢で、勅祭の実現を期して、宮司は同じ吉日の上申を繰り返している。

その頃、郡出身の出先佐三氏が大社に参拝して、拝殿の屋根が破損してトタンが被せてあるのを見て大いに驚き、度々関係当局に陳述と懇請を重ねて、遂に大正十年に至って勅祭の実現をみたのである。

宗像大社史話　社史の中の宗像郡民（十）

福岡宗像会開催さる

去る十一月八日（土）福岡市内で福岡宗像会が開催された。

当日は出先弘会長を初め、三十余名の会員が出席、会長より郷土宗像の発展、変貌振りを述べられ、福岡宗像会も回を重ね、その発展を見たが更に会員の増加を図り、当会の発展を期したい旨の挨拶があり、福田世話人代表から経過報告、及び新会員の推薦等がなされた。

次いで、次回会合を明年四月頃、郷里宗像郡で開催、バスで宗像周遊（父旅同伴）を兼ねて行う等を決定した。その後新会員の紹介などがあり、引続き開宴となった。

久方振りの催しでもあり、懇親の度二加わり談笑つきるところをしらね有様であった。

最後に記念撮影を行い、盛会裡に閉会した。（福岡宗像会からの報告による）

大島村の庁舎完成

――各所での諸祭相続ぐ――

去る十一月二十日、大島村で同村庁舎落成式が宗像大社司祭により斎行された。

これは同庁舎が去る三月十四日、他所からの失火にて焼失したため新築されたもので、六月十六日に起工し、わずか五カ月程で竣工した。建物は三〇八平方米の鉄筋コンクリート二階建、総工費約一七〇〇万円程、住民待合所などが設けられ利用者位に設計された明るい感じの建物である。この日は亀井福間町知事、各県議を始め各界代表等一四〇名程が参列され盛大に行われた。

この外にも祭りのシーズンの為か地鎮祭、竣工祭等が相続き、宗像大社司祭で斎行された。この一カ月ほどの間に神社外で行われた諸祭（出張祭）は、森林都市の上棟祭、江口の潰渡、地鎮祭、船神社祭、赤間郵便局地鎮祭、勝浦漁協地鎮祭、三菱自動車（株）宗像営業所落成式、鎮漁港関連道路起工式、神湊青年会地鎮祭、田中家家祓、北九州トヨタ宗像営業所地鎮祭、田島田中家地鎮祭、宗像高等学校体育館起工式、福間市内福間建設協同学校地鎮祭、玄海町農協倉庫地鎮祭等々であった。

祭り まつり（七）

わが国における冬至の儀式は、古代中国の王朝で行われた郊天の儀（暦の起点である冬至の日に天を祭る儀式）がとりいれた、冬至の日宮中で挙行の式が行われた時代もあったが、冬至節の儀式はわが国では育たず、わずかに禅宗の寺院の行事として残るに過ぎなかった。しかし民間では陰暦十一月二十三日より翌日にかけての大師講の行事として盛んに行われている。今日残っている伝承では二の日弘法大師、甥歳子が村々を訪れたと言われているが、本来は大子（おおいこ）と呼ぶ神の子が新旧生命力を付与するために村々を巡って来て、これより春が立返るという信仰に根ざしている。またこの日に南瓜を食べると中風にからないと言われ、南瓜とかんこんとかを食べる習俗はいまも続々である。

× ×

「祭りまつり」は今回をもちまして終らせていただきます。

一年中で一番日照時間の短い日を冬至と呼んでいる。太陽はこの時に最も南にかたより正午に於ける太陽の高度は最も低くなる。

「紅線錐を巻る」という故事があるが、これは古代中国の魏や晋の宮廷で官女が冬至以後の日脚を紅線でしるしつけ、夏至以後の日脚を他の色でしるしつけたのに由来している。

彼岸以前の中国の王朝では、この日から陽が日増しに復するところから、太陽の運行の出発点と暦の起点であるこの日を祝ったものである。ヨーロッパでも十二月二十五日にクリスマスを祝う習俗があるが、この日がキリストの誕生日であったという証拠はなく、本来この日は冬至を祝う祭日であったものを降誕祭にあてたものと思われる。つまり太陽の誕生日とキリスト教徒の義の太陽たるキリストの誕生日の合一化であることに外ならない。

許斐三代（三）

（其の三十二）

許斐の旗風

葦浦柴舟　作
福田長庵　画

多分此の時に、氏貞入国に際してこれ迄に宗像家から派生した宗像家の諸家が氏続、氏男（氏貞の先代及び先代）の嫡流を無視に見捨てたことに対する彼の内憤も述べられたであろう。

ところが、一族の者たちの意向は氏任の期待した通りではなかった。

現下の毛利と大友の確執による北九州騒乱の中にあって、宗像家重代の御家人たる宗像党がいかに処すべきかということを考えると、理想主義にばかり走ることは今の段階では必ずしも適当ではない。剰つさえ大宮司の許可なくして氏任の考え通りに行動すれば、その事の結果の如何を問わず、「抜け駆け」と誤解される恐れが多分にある。それらも大宮司の命令のままに立ち働いて、隠忍自重することの方が賢明である。

この際、単独行動は避けるべきである。強行策はかえって家中の混乱を惹く利用される機会を与えてしまい失敗した場合事態の収拾がつかなくなった時の危険を考えるべきではなかろうか。というようなことが大多数の意見であった。

こんなことがあって会議はまとまらなかった。憮然として己れの持場に帰った氏任は、それでもなお且つ自分の判断に間違いはないと信じていた。

一族の首長たちが自分の真意を解してくれないということは何としても残念であった。

彼は思案した。そして、この上は一人でも多く味方につけようと決心した。一族会議の模様は、もう早宗中にはかくれもない風聞になっているだろう。とすれば、何れは大宮司に知れる日が来るに違いない。よしどうせやるなら、いま花方を善戦している占部に力を合わせて許斐城の危急を救うことが適切な事ではないかと考えた。

十月十日、許斐氏任は同勢二百余人に下知して許斐城に向った。折しも、その日は寒気が厳しく、その上、霜さえも降って敵も味方も手足がこえ、太刀の柄を握ることさえも容易ではなかった。

こういう状態で多賀隆忠の軍勢と対峙している間に、酉風が強く吹き出した。

占部尚安が叫んだ。

「味方の面々、風上に廻って戦い候え」

この間も戦いはつかず離れず続けられた。宗像党は風上に廻った。それに反対する多賀隆忠の旗印を認めた。敵が宗像党の大将を目指したと同様、氏任も敵将を目指したのであった。

（つづく）

× ×

多賀隆忠が采配を振った。退却である。彼は西方の畦町の線（神興付）に踏止まろうと燃った。

× ×

これに勢いを得た宗像党が追撃をかけた。特に氏任らは息をもつかずに追撃した。敵も直ちに取って返す。今は命を限りと戦った。

この命がけの抵抗には宗像党もなすすべがなく攻めあぐんだ。

「宗像の鬼神」といわれた許斐氏任に対して一騎打ちが出来る程の者は筑前一国の中にも一人いないということは敵方でもよく知っていた。氏任が馬を進めると、敵がさっと開く。隆忠が叫んだ。

「三河守氏任さえ討取れば、合戦の大勢が決せられると判断したのであろう。何百という敵兵がわっと群がった。

これより先、氏任が飛び出したのを見て、白山木城では一寸した動揺が起った。しかし今戦には戦機がある。氏任が飛び出したことが一つの機会になったことは明らかであった。最早や逡巡している場合ではなかった。

すぐさま大宮司の命令が出された。

すぐ右隣りにある羅漢城に在番中の許斐一族、吉田、大和、薯蕷、伊場須、竹井、竹松、別所間田、牧、秋山、その他刀祢治楯光太郎左衛門、金剛兵衛盛尚ら郎党三百余騎の面々が許斐城助勢にかけつけた。

此の頃、大勢の中にとり込められた氏任は阿修羅のごとく戦っていた。

「われを討取り込めんぞ、片はら痛し」彼は敵将多賀隆忠の旗印を認めた。

〝海の正倉院〟第二次沖ノ島調査

玄界の真っただ中に浮かぶ秘境―沖ノ島は、古代祭祀の遺跡として広く一般に知られているが、此度宗像大社復興期成会（会長出光佐三氏、出光興産㈱）の手によって第二次学術調査が進められるはこびとなった。

今回の調査は三年間に亘って発掘される予定となっている。

沖ノ島は、宗像郡玄海町神湊から北西に約六〇㌔の海上にあって、周囲約四㌔、広さ約六十八万平方㍍。原生林におおわれた巨岩の島。神秘のベールに包まれた この島の中央部に宗像大社の一宮である沖津宮が鎮座します。

島全体が同宮の神域で、昔からこの島の掟は厳しい。貝原益軒の筑前国続風土記にも「初めてこの島に来る人は、まず海水に浴し、正三位の社（沖津宮参道の入口にある）に参り、七日の間、毎日一度海水を浴し、第八日に本社にまうづ」とある。

これには隊員のみんなが〝ふるえあがった。現在では、〝みそぎ〟一回きりで本社に参拝することが出来て、さほど厳しくはないが、この島は神域であるが故にその掟はまだまだ厳しいものがある。

今ごの沖ノ島は宗教的なタブーの島〝海の正倉院〟として一躍脚光をあび「大和朝廷の勃興の跡一ともいわれる島だけに古代の信仰形態や当時の文化程度を知る上で、大変貴重な調査として世界各国の関係者の注目を集めている。

本調査隊は岡崎敬氏（九大考古学教授）を隊長に隊員三十余名の組織により破壊なる沖ノ島の掟を守りつつ調査を進められた。

先づ設営隊が九月二十八日に出発、調査に必要な宿泊設備の建設、調査資材の諸準備等が行われた。本隊は、十月五日出発の予定であったが、台風十二号、十三号の影響で予定より三日遅れて八日午前七時半、神湊を三隻の漁船で出発。正午沖ノ島に到着。さっそく全員〝みそぎ〟を行って沖津宮に正式参拝。いよいよ本格的発掘調査が開始されるに到った。

発掘現場は、社務所前生活遺跡（仮の名）、本殿上のC号岩の下、五号遺跡、六号遺跡の三カ所に分れてそれぞれ発掘がなされた。

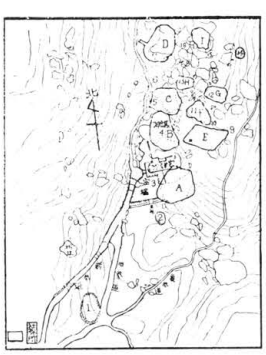


図　発掘現場位置

日本では最大最古の祭祀遺跡であり、しかも宗像の孤島といわれる同島に、縄文時代、弥生時代、いやもっと古く日本の国が始まる以前の祭祀遺跡が発見出来るとあって岡崎隊長を始め調査隊は、日本文化と大陸文化の交流や古代の歴史、ひいては日本の歴史をも明らかにすることが出来ると一同張り切っていた。

期待に違わず調査二日めの十月十日。社務所前生活遺跡より縄文―弥生時代のものと見られる獣骨が無数にでる。九日の十号破片や御饌の大量出土につづく朗報。しかし、この獣骨の発見には隊員達を緊張させた。

これまでの調査では発見出来なかったものである。「もし、これがシカやウサギの骨だったら……」貝原益軒の〝筑前国続風土記〟にも見られるように、この島には野獣はいなかったと考えられている。

日本書紀、神功皇后四十六年の条に「百済の肖古王が、日本の使臣に与えた」という一文がある。

当時、大半の鉄資源は大陸によっていたと想像されるだけに、大陸からの帰途、北海道の主神たる沖津宮にささげられたものと思われる。このような大量の鉄鋌は現在までの処、全国で類を見ないものである。今後の考古学に取ってかなり重要な鍵を握るものと思われる。

十一日は沖津宮に三笠宮殿下が御参拝になられた。この日は天気晴朗、波も静かであった。殿下は沖ノ島の掟を守られ、海水〝みそぎ〟をなさった後、沖ノ島沿岸を御見学。続いて発掘調査に参加された。

大和朝廷いらい国家神として信仰を集めて来たこの島だが、皇族の参拝は三笠宮さまが初めてのこと。若き歴史学者でもある宮さまは、感慨ひとたびならざるものがあろう。

学者としての殿下は「古事記などに〝いわ〟という言葉をよく見ますが、古代人の岩への信仰もうなづけますね」と第一印象を調査隊全員に語られた。

折しもその時、沖津宮本殿近くのC号岩下の五号遺跡より、かつ色の土の中から小さな緑色の陶器のかけらが掘り出された。殿下同行者のなかに陶芸研究家として有名な小山富士氏が、殿下への説明をも忘れてすわりこんでしまった。

彼は目を輝かしじっとその破片を手にする。「これだ！やはり……そうだ」これは大変だ。まぎれもない唐三彩であった。

世界にもまれな唐三彩であることがここで確認されたのだ。

その旨、殿下に説明しながらも氏の顔には緊張と喜びがあった。

その夜は殿下を迎えて調査隊全員のミィティングが行われ、その席上小山氏は、この唐三彩を世界四番目の発見として国際考古学会に発表する決意を述べられた。

唐三彩とは、中国の唐時代（六一八―九〇六年）に焼かれた軟質陶器で白、緑、茶（赤から黄にいたる）の三種の釉（うわぐすり）を使う。

唐三彩は三世紀から六世紀にかけて栄えた美人像などを天子や貴人の副葬品にした。今から約六十年前、隴海線の鉄道工事のとき、唐の旧都の長安、洛陽近くの唐代の墳墓と思われるところから この類のものが多数発掘された。

唐三彩は千余年をへて地中から姿を現わし、その美しさは世界に喧伝されている。

唐の絢爛たる文化を象徴する唐三彩は、世界各国にその影響を及ぼしている。渤海三彩、わが国の奈良時代の三彩、遼三彩、ペルシヤ三彩とその三彩陶の技法はいろいろと広がってはいるが、これらはいづれも唐三彩の影響を受けて出来たものには間違いあるまい。

同時に唐三彩以上の美しさを出し得たものはなかったと言われている。この玄界の孤島から発見されたことは興味深いものがある。

中国文化と日本文化の交流、更には大和朝廷の勃興期であったことの裏付けとして重大な発見であった。こんど発見されたものは直径約八㌢のツボの口の部分と見られる破片約二十片。こまかくくだかれていたために確には出来ないが、同遺跡は七世紀頃のものと推定。とすれば、当時は遣唐使が盛んに海を渡った時代。王候貴族に珍重された唐三彩は、やはり当時の日本を代表する贈答に贈られたものとしか考えられない。

当時の小船に航海術を思うに、故国の土を踏めなかった遣唐使がいかに多かったことか、その苦労は計り知れないものがあったろう。唐からの帰途、この島に立ちより、故国の土を踏んだ喜びを神に感謝し、神前に貢ぎものをお供えして航海の安全と使事任務の遂行を報告する姿が伺える。

これらの唐三彩が遣唐使によって供えられたものならば、少なくとも当時は、この沖ノ島の祭祀が国家的規模で行われていたという証拠ではなかろうか。

唐三彩の発見より先に古墳遺跡から黄金色豊かな中国製と思われる竜頭一対を発見した。

長さ十八㌢。左右一対。塗金青銅製。すしりと重い。

中国古典に良く見る竜の頭にそっくり。だが独特の長いヒゲは見られない。腹ビレと思われるものが付いている。置かれた状態を見るに向い合ったまゝの形であった。これは、明らかに神前の左右に並べられたものらしい、お供えものとしては最高のものだったろう。

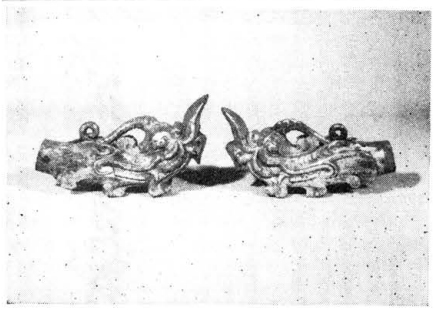
六号遺跡からは、八世紀頃のものと推定される祭壇が発見された。祭壇と思われる処には、石を積み並べ、その上に平らな広い石を敷いたと思われる跡形があった。

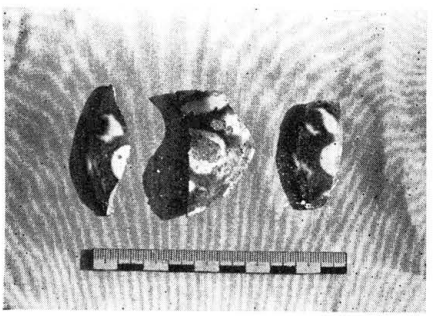
表土近くには、かなりの遺物があったと考えられるが、今はほとんどなくなっていた。

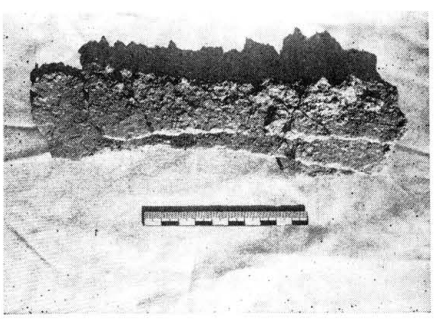
今調査の段階では、ただ祭壇というところで終っているが、次の調査ではより一層祭壇としての型がはっきり打ち出されるものと思われる。

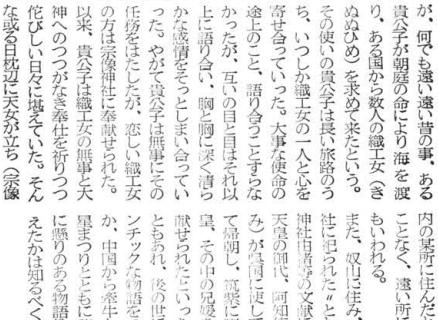
こうして大々的に行われた沖ノ島発掘調査も一時休息の後、明年は三月から五月にかけて再び調査が開始されることになっている。今回発掘された遺物は、馬具、鏡、武具、装身具、土器、その他数千点にも及ぶであろう貴重なものであった。

千古の歴史を秘めたこの玄界の孤島沖ノ島に、貴重な神宝の数々がこうして発掘されたのである。これらは日本でも例を見ない大祭祀遺跡であり、古来、沖津宮も遥べき男の姿









宗像伝説　其の九十七

天の川異聞

筑前大島の南面、丁度中程に宗像大社中津宮が鎮まりまし、そこの小川を天の川という。

水の清きは天の真井とともに今でもみそと厚木の川の源には北方の角に末社奉牛神社が、南方の角に末社織女神社が祀られている。

この社が何時頃祀られたか、その信仰がどのようなものであったか確かでないが、石見式鏡脇に「筑前大島と云所に鎮座して有。川よって身にかける 何怀目の手を隔て宮有。北を遙拝宮と云。男を申者は彦星の宮に祷り、女を申者は七夕の宮に祷る也。七月一日より七日迄潔りて、川中に三重の棚を結て星祭をして、三の手洗たらひに水を入て影を見る也。何れも手洗をうつれば其男に逢べき女になるなど知也。云々」とみえ、古今集束雅抄に同じような事がみえるところから、少なくとも鎌倉時代より遥かに古く、中央に迄浸透していた程根強い信仰であった事がわかる。古老によると、今は語り人も少なく、天の川の話しは薄れやりとしか知らないが、何でも遠い遠い昔の事、ある貴公子が朝廷の命により海を渡り、ある国から数人の織工女（きぬぬひめ）を求めて来たという。その使いの貴公子は長い旅路のうち、いつしか織工女の一人と心を寄せ合っていった。大事な使命の途上のこと、語り合うことすらなかったが、互いの目と目はそれ以上に語り合い、胸と胸に深く潜り合っていたら、やがて貴公子は無事にその任務をはたしたが、恋しい織工女の方は宗像神社に奉献せられた。以来、貴公子は織工女の無事と大漁祈願のつづきを祈りつつ侘びしい日々に堪えていた。そんな或る日秋辺に天女が立ち（宗像の神という）「宗像の中津の宮に行くが良い」とおつげになられたという。

半信半疑ながら、貴公子はお暇をいただき、中津宮へ神に仕える身となった。しかし、それが一体何を意味するのか、海を隔てたところに織工女がいるそう思う事で動揺する己れを感ぜられるのか、様々な不安と、妄想が襲ってきた。それらを振り払うかのようにその人は小川で一心に潔めたという。ある晩のきれいな夜、例によって身にかける何怀目の手桶の水を持ち上げた時〝はっ〟とした。澄る空を手桶を通き通るとうであろう、織工女が今にも語りかけようと水に写っているではないか。わなわなと震えつつ確かめるが夢ではなかった。それからの長い無言の語らいは彼を幸福で満たした事は云うまでもない。その後、毎年この頃になると、手桶にその女が訪れたという。それから何年を経たものか、やがて二人の姿は岡社から見えなくなった。そして貴公子は無事に帰朝の任を果たし、織工女の待つ宗像の地に帰ったが、織工女の姿はなかった。

（H）

宗像大社献詠
俳句作品集（八十四）

久留米　篠田太郎坊
コスモスの薄紫に駅明くる

福岡　広田　美津
潮に浮く秋の宮島献茶祭

田熊　小野角次郎
蓮を掘る温取る股火霜の朝

田熊　小野かをる
ふれ売りの一尾添えたる秋がます

小倉　伊豆　湧泉
秋潮に艤を競いつつ女神渡御

村山田　吉田佐市郎
整然と団地は出来て紅葉きゆ

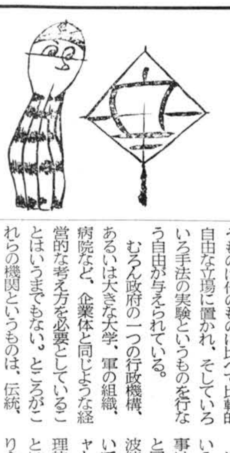
大井　吉田　和子
秋天の紺の深さや山の湖

東京　小浦登利子
子に案内されし埠頭は冬霞

津屋崎　井浦　良介
車窓より雪に消えゆく訣れの掌

京都　路　草
破魅弓を孫に送って年暮るる

田島　末安　大孝
酔人の歌にも勢う師走街



出光佐三一問一答シリーズ ㊵
働く人の資本主義

質問　どうしてそのように日本が「人の世界」で、外国が「物の世界」というふうに言えるのですか。

出光　簡単に言えば、それは祖先の違いからです。外国の祖先は我欲、利己の祖先です。我欲、利己のために善悪を問わず征服してしまう。その次には、また我欲、利己の人が出てきて、前の征服者がかりに善政を施しておっても、これを征服していく。この征服の形を最もよくあらわしているのが、城壁のなかにたてこもって、その周囲に国民大衆がおるという姿です。西欧ではエンペラーやキングなどは城壁にとり囲まれて、そのなかに住んでいた。これは朝鮮や支那でも同じです。そういう大きな城壁に囲まれて防備されていないと安心できない、いつ新しい征服者に滅ぼされるかわからないということなんです。

ところが日本では、皇室も国民も無防備です。もっとも、日本でも征服者に準ずるようなことをした者は、江戸城のごとく城のなかに住んでいました。京都の二条城など、ちょっと一カ月ぐらい将軍が滞在するだけでも、やはり城壁に囲まれて防備している。これは征服者の形です。征服者の形で防備していなければ、善悪にかかわらず、誰かが来て、また征服されるという危険をいつも感じておったということですね。

日本を除く世界の国ぐにの祖先は、そういう我欲、利己の征服者であり、その征服もながくて数百年しかつづかなかった。これに反し、日本は数千年の平和の歴史を楽しんできたのです。そういう征服、革命の連続が外国の歴史だから、国民は搾取ばかりされて、自分を守ってくれる人はいない。生命財産の危険をいつも感じている。そこで、自分のことは自分でしなければいけない。誰も頼る人がいないというところから、個人主義になる。

そうして圧迫に対して自由を主張する、人権を主張する、さらに金とか物とかを貯わえて頼るようになる。ちょうど、ユダヤ人が、自分らを守ってくれる国が滅びてしまって、自分のことは自分でやらなければならないから、拝金思想になったのと同じです。あれは当然、ああなるべきものだと思いますね。そういうように、自分を保護してくれる大きなものがなかったのみならず、いじめられたということから個人主義になり、拝金思想、対立闘争になった。そこに、すべて物に関係して、人生は物だという考えが出て、物を第一義的に考え、物を解決すれば人生はすべて解決がついたように錯覚するのも当然でしょう。

ところが日本の場合は、祖先が無欲、無私です。そしていわゆる徳の形を国民に教えられ、搾取したり、圧迫したり、征服したりしようとする悪い奴を滅ぼし、平定していかれた。この平定と征服という言葉は面白いと思いますね。

征服のほうは、自分の我欲のためには善悪にかかわらず滅ぼす。ところが平定のほうは、平和、福祉のために役立つ人、みんなにとっていい者は奨励し、育てていく、悪い者だけを滅ぼすということです。これが徳の政治ということじゃないかと思います。日本人の徳という言葉に相当する字が、外国にあるかどうか。徳ということがほんとうの人間のあり方であって、それがあれば、お互いに譲りあって平和にいくということではないかと思いますね。

われわれの祖先は、外国の祖先の我欲、利己とは正反対の無欲、無私の姿をとられ、徳をすすめ、悪をこらしめ、全体のためにいいように導かれて、平和に仲よく暮らすことを教えられた。観念的、抽象的な学問や理屈としてでなく、身をもって和の実体をつくられた。私は外国にもお互いのため、全体のためという和の哲学はあったと思うんですが、我欲の征服者にとっては、それが征服、搾取の邪魔になるんですね。それだから哲学はあったけれども、実行されず、天にまします神になったのではないかと思うんです。

そういうわけで、日本には仲よい姿、和の実体ができあがっていた。そこに仏教とか儒教とかが入ってきて、平和の国体に抱かれてみずから発達すると同時に、日本の国体や民族性に理論や文字をあてはめ、みがきあげたということなんです。この平和に仲よくするということが実行されていたところに、日本と外国の根本的な違いがある。

そういえば、日本の皇室だって、わがままされたじゃないかと言われるかもしれないが、それはやはり人間であるから、百何十代のうちには、人間らしいことをされた方もあるでしょう。数千年という長い間にはそんなことはあるのがあたりまえであって、そのことによって、日本の皇室が無我、無私の姿をとられたことが否定されるようなものではありません。百何十代、数千年間、中心に流れておるものをずっと見きわめれば、やはり無我、無私であって、大きな愛の手を国民にのべられて、国民にお互いに仲よくすることを教えられている。また、平和な日本の歴史においても戦国時代のごときものはあったが、これも一部の人が人間の矛盾性を発揮したということです。しかも戦乱は一地方にかぎられ、戦っているものは武士同士であって、一般国民は生命財産の危惧を感じつつ毎日の生活をするなどということはなかったですね。

こういう無我無私の皇室を中心として平和に仲よく暮らしているうちに、お互いとか、全体のための個人というような考えが国民の間に育ったんです。一方では、日本人は物などは第二義的で、ぜいたくしておればお互いの仲が悪くなるから、ぜいたくは慎めよ、質素にせよ、ということを教わってきている。やはり人間は物を中心として対立闘争することが最も多いから、それを慎んでお互いに助けあえ、ということを教わってきていると思うんです。そこに日本人の金や物を超越する民族性ができあがったんです。この金や、物を超越するところから、日本人の清廉潔白とか、責任感が強いとかという独特のあり方が生まれてくるわけです。その代表的なものが武士道であり、私どもの知っている明治時代の官公吏や、教育者のあり方だったんです。明治時代の官公吏や教育者が世界の垂涎の的だったのも、その清廉潔白と責任感の強い点にあった。

外国では、すべてを金に換えて労働は金で売るべきものなりということになって、金に換えることを楽しみとし、金に換えられないことを苦しみとしているが、日本では、金に換えられない人生の楽しみを持っている。それがさらに積極的になると、人のために金を出してやり、そのことを人にも知らさずに自分だけで楽しむ、というようなことにもなってくる。これが東洋の陰徳ということなんです。出光創業のときに日田重太郎さんが私に資金を恵まれて、しかも「金をもらったことを人に話すな」と言われたのは、この陰徳を身をもって示されたということです。私にとっては一生の尊い教訓となっています。

そういう日本人の、金を第二義的に見る行き方から、清廉潔白を尊び、清貧に甘んじ、清貧を誇りとさえする思想や、進んで耐乏生活をやるというようなことが出てくるんですね。この清貧を誇るなどという考えは、外国人には想像もつかんだろうと思いますね。昔の先生が清貧に甘んじて子供を教育されたということが、日本民族を育てる尊い基礎になってきたのではないですか。だから私どもの子供のときには、先生を最も尊い人と思っていたんですね。

（次号へつづく）

経営とは何か
PFドラッカー

企業体というものが人間社会における機構、機関として独占的なものでもなければ、また個有なものでもない。他にいろいろな機関があり、それがそれぞれ人間の組織であり、管理経営を必要としているが、企業体の大きな特質というものは他のものに比べて比較的自由な立場に置かれ、そしていろいろ手法の実験というものを行なう自由が与えられている。

むろん政府の一つの行政機構、あるいは大きな大学、軍の組織、病院など、企業体と同じような経営的な考え方を必要としていることはいうまでもない。ところがこれらの機関というものは、伝統、歴史、社会的な事情のために常に一つのワクにはめられている。そして一般の企業体のように自由に種々の新しい手法を試みるということから除外されているために、実際どういうことがなし得るのかというその例を、むしろ企業体に求めているということがいえる。

したがって大企業の経営機構というものを設計していくという仕事は、その経営体内に対する影響と同時に、外部に対しても大きな波紋を投げかけ得る。この点について企業体のビジネス・マネジャーというものの一つの大きな倫理的な責任、または倫理的な機会というものに当面しているのであり企業経営者としての責任、機会が与えられていると考えられる。

知識を備えているすべての人に新しい知識を生みだささせるすなわち学者になれということをいっているわけではない。ただわれわれがこの知識階級、知識職業にあるものに投げかける要求というものは、その仕事を当初はじめたときよりも、さらにその仕事、職業として取り上げているその部門をより強く、より豊富な、よりよいものにするための努力というものを要求したいのである。

こういった専門家、職業人である以上は、その職業人が去って後継者の代になった場合、その後継者が必ず先駆者よりもさらに強力な、そして経験豊富なものであるような教育指導をするということを期待している。

この職業人の職業人たる資格はどこにあるか、すなわちその先生よりも弟子が必ず秀いでるものである。そこに本来の職業人のよさがあるのだとわれわれは常に考えている。

ところが実際にその後継者としては、特に能力がすぐれているわけではないが、よい先輩を得ていればその背中におぶさって、より よい仕事、より広い視野、より余計な知識というものを備えて、より多くの仕事を成し遂げるような立場に置かれてくるのである。

普通のごく日常の倫理上の教えである盗んではならない、あるいはワイロを取ってはならない、ワイロを出してはならないといったことはなにも倫理の問題ではない。よく考えれば、自分自身以外に常に一緒にくらさなければならないものはなにか。したがって明日自分の顔を鏡に見た場合に、どういう形の人間であるべきかということについて常に考えていなければならない。

こういった非常に密接である自分とくらしていれば、その密接な関係を盗人、あるいは詐欺師、そういった人間と同棲するということと同じに考えてよいかどうかということを、必ず考えるであろう。言いかえれば、正直であるということは、むしろ自覚上の問題、あるいは個人の几帳面さといったようなことに根源を持っているのであり、真の倫理的な問題ではないとすらいえる。

（つづく）

――宗像藪庵先生百話――
南方　華やかなりし頃

宗像太郎坊

熱帯潰瘍

やがて、南洋の私達にも暦の上の正月が訪れて来た。聯隊本部より餅が一俵届けられて来た。私達はさらにジャングルの奥で作業している兵達のために、その大部分を俵に入れてネシア人労務者に担がせて、奥に届けさせた。ところが奥地の分隊長達から餅が着かないがどうしたのかと、問い合わせが来はじめた。おかしいなあと思っていたが、このネシア人は途中でこっそり俵の口を開けて中を覗いて見ると、これはどうだ、まっ白い餅がいっぱい入っている。つまんでみると柔かく、押すと女の臀のようにくぼむ。スマトラにも餅米はあるが、日本の餅のようなものではない。これはしめた、天の恵みとばかりに、にっこり笑い、横径にそれて、仮りの塒を作った。このジャングルは山蛭や蚊が多いが、そこは現地の人間、うまく安住の地を作って腰をおろしたらしい。毎日この餅を喰っては寝、喰っては寝、彼等にとっては食足りて仕事をしないことが何よりの幸福である。

あるネシア人の幸福

さて毎日、この餅を喰っては寝、くっては寝、彼等にとっては、食足りて仕事をしないことが何よりの幸福である。そのうちに喰いつくして、こそこそジャングルから出て、宿舎に戻って来た。ここらが我々には考えられないところである。悪いことをしていても、悪かったとも思わず、のこのこと元の宿舎に帰って来るなど、われわれの常識では考えられない。ひっぱって来て怒鳴りつけてやったが、そのうち、なんだかこちらの方が馬鹿馬鹿しくなってきた。おかげで山奥の兵達は正月餅なしで過ごした訳である。可愛そうに、一個の正月餅にもありつけず、年中こき使われている兵達を思うとまた、いらだたしさがこみ上げて来た。このネシア人を睨みつけていたら、阿呆みたいな顔をしながらジェスチュアで、胸が焼けて困るとこぼしていた。四斗俵一俵の餅を喰えば、胸が焼けるのは当り前である。この天罰野郎！

ダウン・ガジア

南洋にも日本の黄櫨のように皮膚炎を起す植物がある。ダウン・ガジアがそれである。ダウン・Daunは葉ガジアCajahは象という意味である。ガジアは象であるが、一般に「大きい」という意味に使われている。桐の葉のような大きな葉がついている。得意の野糞をやらかして、ポケットを探れど紙はなし、はて困ったなと辺りを見廻すと、幸い幅の広い葉が木についている。天いまだ我を見捨てたまわずと、妙なうぬぼれを出し、横にいざりながら葉をもぎ取り臀を拭くさあ大変なことになる。暫くすると臀がひりひりして来てやがて「猿の臀は真ッ赤ッ赤」よりひどくなる。労務者の一人が、この葉に全身触れて、横に寝ることができず、夜通し杖をついて立ったまま夜を明かしたのがいた。幸い命はとりとめた。もひとつダウン・アヤムDaunAyam・というのがある。この葉は鬼灯の葉より小さく、毒性も軽く、指で掻くとまもなく治る。

アチェの日本人

さて、このような人の住む果にいても永くなると私の名声はカンポン（部落）カンポンに拡がり、グンパン界隈の大親分のようになって了った。路を歩いていると（大概、ネシア労務者を四、五人家来のように連れて歩いていたが）通り過ぎる土民が私の前で路上に膝まづき、両手で私の右手をおし戴き、尊敬と恭順の意を表して通るようになった。

（つづく）

「宗像郷」
竹中岩夫

宗像郷の所在について、こうした先輩達の論考はあるが、定説とすべきものはなく、遠賀郡誌の編者林翁も迷っていられたようである。それでは筆者の考えを述べて見ることにしよう。

二、篠隈神社

文政三年（一八二〇年）の続風土記付録御調子仁付神口書上帳控（波多野家文書第三輯、能美安男氏編集）

中間村本社
一、大宮篠隈宮　祭神　宗形大神　天照大神　五男太神
（中略）
当社は仲間村本社産神にて、五穀成就、雨乞、日乞、風留、諸病退散、牛馬安全の祈願、村中家別諸祈祷、御獅子舞、触中夏越大祓、当社の御加護に据れる所也。昔より郡内七社の其一社と云伝う。神霊の和魂は本宮八王子社（御社より巽の方狐背戸山に在。石殿也。下文に委しければ爰に省く。）に鎮り玉ふ。昔御宮居在し古跡の山、今も宮林と云。（今八王子御馬場つづきにて大日堂在り。下文に委し。）永久元年（一一一三年）四月神託に依て荒魂の御社を今の御山に移し奉る所也。大宮は惣名、狭々隈は山の名なりといふ。西光寺（御社の麓にあり、宮法師の住寺なり。今田字に残るのみ。御社記に然は西光寺の住僧寿林と書せり）御長屋（中略）繁栄たりしとかや。（中略）建長三年（一二五一年）麻生次郎兵衛尉資時、御社の法度を定玉ひ、地頭、代官に守らしめ、月毎の入目は一郷一名の田畠の高によって出来し庄官順番にて元〆せしと也。享徳元年（一四五二年）五月、大檀那麻生上野介家春、御社改造し玉ふ置札あり。享禄年中（一五二八年－一五三一年）山鹿城主山鹿筑前守当社を尊崇し、御祭礼領内にひとしく執行し玉ひし事、麻生家より定玉ひし御宮帳に詳なり。（中略）永禄六年（一五六三年）吉松藤兵衛尉官為有吉屋敷の内小三郎作、西のより小畠寄進奉り、御神威を仰がれし一通あり。同七年、仲間源左衛門尉、御供田五段地寄付し奉られ、先例にまかせ、段銭除奉られし証文あり。

（続く）